

言語・文学委員会人文学の国際化と日本語分科会（第24期・第5回）議事録

開催日時：2019年7月7日（日）14時～18時20分

場所：東京大学文学部3号館7階スラヴ演習室

出席者：窪園晴夫、桑原聡、竹本幹夫、田口紀子、巽孝之、沼野充義、日比谷潤子、平田昌司、松森晶子、吉田和彦、米田信子。（全員出席につき○印省略）

招聘参考人：マイケル・エメリック（UCLA 准教授、早稲田大学准教授）、ピーター・バナード（ハーバード大学 PhD、文教大学・早稲田大学・防衛大学校等非常勤講師）、後藤健介（東京大学出版会編集局次長）、ベアータ・コヴァルチック（ポーランド・ヤゲロ大学助教授、日本学術振興会外国人特別研究員）

議事内容

（1）前回の議事要旨の確認

平成31年3月9日の本分科会の議事内容を確認し、一部訂正（第二頁下から二行目の一文削除）の上、了承された。

（2）書記ならびに会計委員の選任について

桑原委員が書記となることが承認された。但し桑原委員が欠席の際は、委員長が指名することとした。会計委員は置かないことが了承された。

（3）本分科会よりの提言の準備作業について

各委員より、A4一枚程度の資料に基づき、報告があった。

委員の報告があったのち、ディスカッションを行った。内容を摘録。

・人文学の国際化にあたって英語の必要性については概ね反対はなかったが、多文化を対象とする人文学研究にあっては、多言語主義、複言語主義、多文化主義を理念に謳う必要があるとの指摘が複数あった。

・国文学では日本語による発信が正常であり、英語による発信はかえって質を落とすことになりかねないとの指摘があった。

・国語学では事情がことなり、積極的に英語で発信すべきとの指摘があった。

・優れた日本語による業績の英語翻訳を進めるべきとの意見があった一方、予算的に厳しいとの意見もあった。

・他方、提言は具体的である必要があり、理念をどのように具体化するか、ないしは、政府、文科省を説得できるような具体案を考えるべきとの意見があった。

・日本における人文学研究資料・成果のデータベース化が遅れているとの複数の指摘あり。「見える化」の重要性が指摘された。

(4) 海外の日本研究者の立場からみた日本からの情報発信の問題点等について

休憩を挟み、16時10分頃、分科会委員長より前半の議論の内容が簡単に説明された後、4名のゲストから発言・提言があった。

・発信と受信の関係と、何を発信するのかと発信媒体を考慮すべきとの意見がバーナード氏よりあった。氏は、泉鏡花作品の英訳『Japanese Gothic Tales』（ハワイ大学出版部）と福岡黒田藩プレス刊行の『Kaiki』を例に、泉鏡花訳がなぜアメリカで受容され、後者があまり知られていないかを、出版者の地域性、レイアウト、作品の選定等を例に具体的に説明した。また、氏は、欧米での日本研究では欧米以外の業績（日本を含む）が十分考慮されていないことを指摘。

・後藤氏は、供給と需要のミスマッチを指摘。何を誰に届けるかという問題を解決するには著者と読者をつなぐ編集者の役割が大となるが、日本では科研費等で編集者のための間接経費が出ないことを指摘。

・ポーランドのワルシャワ大学で学んだコヴァルチック氏は、ポーランドでは国家政策もあり、研究者は論文・著書を英語で執筆する現状を紹介。他方で、英語による発信は、他文化を研究対象とする際、他文化の言語・言葉がもつ文化的広がり、深さなどを正確に伝えられない危険性があることを指摘。

・UCLAのエメリック氏は、日本文学研究者として日本人の日本文学研究者が英語で発表することを望まないと言明。その理由として研究の質が落ちることを指摘。ただし、日本人であれ日本人以外であれ、日本文学研究者が日本および日本以外で開催される学会、シンポジウムに参加することを推奨。世界で何が議論されているかを知り、その議論に参加することが極めて重要と指摘。日本での日本文学研究のディスコースと世界で行われている研究のディスコースが同じでないことをも指摘。日本文学を研究する日本の学生は、英語（読み、聞き取る能力は必要）以上に、文献（漢文、変体仮名、崩し字等）を「よく読む」訓練をすべき。アメリカで日本文学を研究している日本人学生が、日本で里帰り発表や研究をするための奨学金などが用意されていない現状は改められるべき、日本ではデータベース化が遅れていることが問題と指摘した。

その後、全員が加わりディスカッションを行った。

(5) 次回の予定について

提言の締め切り（3月末。後に委員長が事務局から転送の書類を確認し、4月初めに訂正）合わせて、今年12月頃との提案があり、詳細はメール審議とすることが了承された。

(6) その他

なし。